

釧路湿原自然再生協議会
第 20 回 再生普及小委員会
議事要旨

日時：平成 24 年 12 月 13 日 14:00-16:00

場所：釧路地方合同庁舎 5 階 第一会議室

1. 開会
2. 委員長及び委員長代理の選出
3. 議事
 - 1) 行動計画ワーキンググループ経過報告
 - 2) 環境教育ワーキンググループ経過報告
 - 3) 鶴居村釧路湿原流域ガイドマップ作成について
 - 4) 第 2 期釧路湿原自然再生普及行動計画の中間評価について
 - 5) その他
4. 閉会

1. 開会

委員自己紹介

2. 委員長及び委員長代理の選出

委員から高橋委員長と新庄委員長代理が推薦され選出された。

3. 議事

1) 行動計画ワーキンググループ経過報告

(事務局)

- ・資料 1-1 再生普及行動計画 WG の取組み進捗状況について説明。

1 行動計画の進行管理、活動支援

- ・今年度、新たな取組みとしてワンダグリンダプロジェクト参加団体間の交流の促進を目的として、ワンダグリンダプロジェクト応募者、再生普及小委員会委員、行動計画ワーキンググループのメンバーに集まってもらい交流の場を設けた。関係者間で横の繋がりを作る機会として有意義であり非常に好評だった。
- ・ワンダグリンダプロジェクト応募者の特権の一つとして、カヌーツアーを行った。新庄ワーキンググループ座長の案内により、参加者にカヌーを通じて湿原に親しみ楽しんでもらった。

- ・もう一つの特権としてフィールドワークショップを行い、ワンダグリンダプロジェクト応募者や再生普及小委員会の委員などから参加者を募り湿原ツアーを実施した。
- ・第9回フィールドワークショップは8月にキラコタン岬で行い、普段なかなか行けない湿原に入り、湿原の魅力を体験。
- ・第10回フィールドワークショップは、来年2月に冬の久著呂川で予定している。

2 情報発信・普及活動の拡充

- ・行動計画ワーキンググループのホームページのリニューアル作業を現在行なっている。
- ・釧路湿原自然再生のPR活動として、釧路湿原の航空写真パネルを使い、イベントなどでパネル展を行なった。今年度は道の駅摩周や、たんちょう釧路空港、鶴居村役場のロビー等でパネル展を行った。
- ・今年度からは航空写真パネルの貸し出しを始めて、釧路市立博物館や子ども遊学館が活用した。

3 自然再生の参加の機会づくり

- ・第2期行動計画の重点分野である自然再生の参加の機会づくりとして、釧路湿原で行われている自然再生の現場を地域の人や関係者に見学や体験をする機会を設けた。
- ・今年は2ヶ所で実施した。1ヶ所目は、達古武森林再生が行われている釧路町達古武の現場見学会。キャンプ場の利用者を対象にクイズ等を取り入れ、人工林と再生中の自然林の違いを「朝の散歩」として見学。
- ・気軽な散歩というスタイルが参加者から好評であった。今後はキャンプ場と連携しながら、いずれは達古武キャンプ場主体のアクティビティの一つになるように働きかけていきたい。
- ・2ヶ所目は、今年度から湿原再生事業が始まる鶴居村幌呂地区の現場調査。今後ハンノキの衰退が予想されるハンノキ林において地域住民に参加協力のもとハンノキ調査を行った。
- ・また、調査以外に、ヤチボウズの解体や、クイズでヤチボウズの重さを予想し実際に計測したり、ヤチボウズの中に沢山生息しているアリの観察したり、楽しみながら湿原に関心を持つ機会になったと感じた。
- ・調査当日は下幌呂小学校の学芸会と同じ日程となり、参加者が少なかった。2月にも予定し、日程は地域の方と調整しながら決めたい。
- ・今年度初めての取組みとして、市民の自然再生の参加強化期間（今年6月～8月）を設けて、自然再生の取り組みのうち市民が参加可能なイベントを一つのチラシ

に集約し一括で PR した。中には植林作業やゴミ拾い、外来生物の駆除、またはガイド養成など様々なジャンルの取り組みを紹介した。

- ・同イベントの趣旨は、自然再生事業とは、そんなに難しいものではなく、市民でも楽しく参加できることを知ってもらいたいということ。また、取り組みをしている団体の人達への活動の PR も兼ねていた。日本製紙クレインズの選手の参加協力も今まで釧路湿原に関心を持ってなかったクレインズのファンの方が選手と一緒に参加することがきっかけとなり湿原を好きになったという声もあった。
- ・資料 1-2 知名度調査アンケートについて説明。
- ・釧路湿原自然再生事業やワンダグリンドプロジェクトについての認知度を調査して今年で 5 年目になる。アンケートは釧路駅、イオン釧路昭和店と温根内ビジターセンターの 3 箇所で計 209 件の回答を得た。
- ・5 年間認知度について調査を行なっているが、特に大きな変化は見られない。
- ・参考 1 として、湿原周辺 5 市町村の住民に絞ってアンケートを取りまとめると、全体の回答よりは、それぞれの認知度は高い結果であった。
- ・参考 2 として、「釧路湿原に最近出かけていますか」という質問については、70% 程が出かけてないとか、数年に一度ぐらいなど、なかなか湿原に出かけていないことがわかった。「市民参加の自然再生イベントがあれば参加したいと思いますか」という質問については約 7 割の人が「いいえ」と回答した。来年度のアンケートでは参加したくない理由を聞いて取り組みに活かしていきたい。
- ・資料 1-3 「ワンダグリンドプロジェクト 2012」中間報告（概要）について説明。
- ・取り組み者数は、現在 50 団体 74 取り組みである。前回の委員会での報告後に追加された取り組みとしては、NPO 法人環境把握推進ネットワーク、酪農学園大学の研究室などがある。今年度の取り組みについては、報告書に整理して公表する。
- ・資料 1-4 「ワンダグリンド・プロジェクト 2012」応募状況（一覧）について説明。
- ・新しく加わった取り組みを入れ今年度の応募状況の表を作成した。
- ・資料 1-5 「ワンダグリンド・プロジェクト 2013」募集概要（案）について説明。
- ・来年度のワンダグリンドプロジェクトの応募を集中的に募集する期間として、2 月 11 日から 3 月 11 日までの 1 ヶ月間に PR を行う。基本的には随時受け付けている。
- ・行動計画第 2 期の再生普及行動計画の三つの柱というところを、わかりやすく紹介していきたい。
- ・ワンダグリンドプロジェクトのスタートは、通常は 6 月開催の小委員会で報告し、その後に公表という順序であったが、次回からはワーキンググループを 4 月に行い、その中で内容を確認し問題がなければ、その後に新年度のワンダグリンドプロジェクトの取り組みをスタートさせたい。

(委員長)

- ・ワンダグリーンダプロジェクトで取組みを行なっているトラストサルン釧路のボランティア植林月間の企画ではいかがであったか。

(委員)

- ・毎年5月の1ヶ月間を植林月間として取組みを行なっている。1ヶ月に1000本を植林することもある。イベントでは50人ほどが参加。植林の事業地は駐車スペースが小さく道路も一時的に渋滞したりと、他の道路利用者から苦情が来たこともある。現在は少し離れた場所に駐車場を確保している。
- ・これまで広葉樹の苗木を20,000本ほど育ててきた。年間3,000本位植えたいと考えているが作業が追いつかないところ、たくさんの方に参加して頂いて、お陰で更地であった山もだいぶ木が植えられつつある。
- ・エゾシカ、ネズミ、ウサギの食害があり、ひどい場所には一部に防鹿ネットを張って対処しているが、ネットがない場所の被害が大きくなる懸念など課題は色々ある。
- ・5月は特に気候的にも作業をするには良い時期であるので、是非これからも定期的な参加をお願いしたい。

(委員)

- ・釧路湿原ふれあいセンターでは、釧路湿原の上流域である雷別地区という国有林で、再生事業を行なっており、市民参加のイベントを行なっている。そこも遠く判りにくい場所でもあるので、参加者は釧路湿原ふれあいセンターに集合しバスで現地まで行っている。
- ・今年は2回実施した。1回目は雷別地区の中でも上流部にあたる国有林の中で、将来の森林再生に活かすためにシードトラップを設置し、広葉樹のタネをとるための活動をした。さらに、外来生物のアラゲハンゴンソウが繁茂している場所で駆除を行った。

2) 環境教育ワーキンググループ経過報告

(事務局)

- ・資料2-1 2012年度環境教育WGの取組み報告について説明。

1 教員研修講座の実施

- ・釧路湿原で中学校、小学校の教員を対象とした研修を実施。実際に現地で釧路湿原について知ってもらい、学校の授業にも取り上げてもらいたいという目的である。今年は8月と10月に実施し、4年目となる。
- ・環境教育WGでは、総合学習の時間だけではなく、理科や社会の教科学習に上手く

使えるような教材の提供をしたいと考えている。

- ・ 8月の研修は釧路教育研究センターと共催で行い、塘路湖周辺で実施した。教員の単位にもなるということで、新人からベテランまで20名ほどの参加があった。カヌーで塘路湖に出て、水深と植生の関係について調べたり、対岸まで漕いで行き、森で湧き水の水量の測定やパックテストを使って水質調査を行った。森林と湧き水と湖の一連の関係、湖で行われる漁業にとって森林の役割と重要性について、また、塘路湖漁業協同組合が実施している保護管理に関して学習した。
- ・ 塘路湖の調査の後には、特定外来生物のオオハンゴンソウについて座学、塘路の二本松まで行き、オオハンゴンソウの駆除を体験。
- ・ 2回目の教員研修講座は10月に実施し、教員への公募で6名が参加した。小学校5、6年生の理科で学習する「流れる水の働き」の単元を意識して、釧路川の上流から下流まで下った。
- ・ 屈斜路湖のさらに上流にあたる尾札部川は、屈斜路湖に流入する川で一番長いことから、釧路川の源流にあたる。林道を入りバスと徒歩で森を歩き滝を目指した。滝ではパックテストを使った水質調査、河床の石や水生昆虫の観察などの学習を行った。その後はバスで釧路川沿いに下り、摩周道の駅近くの河川敷での水質調査と観察、湿原からはカヌーに乗り、二本松橋では露頭で侵食の観察、鶴見橋周辺で水質調査をして研修を終了した。
- ・ 今後も研修講座を続け、現場の教員に湿原に来てもらう機会を作り、授業でとりあげてもらうきっかけ作りをしたい。

2 教科学習での活用促進を目的とした湿原を題材とした学習資料の作成

- ・ 学校に湿原を題材とした教材を提供する目的で、実際に理科や社会の単元に即した釧路湿原バージョンの教材について、ワーキンググループで議論を進めている。
- ・ 現在、対象としている単元は、小学校5、6年生理科の「地層」、「食物連鎖」、「流れる水のはたらき」である。
- ・ 「地層」については、資料2-2を使って説明。
- ・ 「食物連鎖」に関しては、釧路湿原の生き物を使って説明できるようなイラストを作成中である。ホームページでもアップしていきたい。
- ・ 「流れ水のはたらき」については、教員研修でとりあげた様に釧路川の上流から下流までの写真や動画を使ってホームページ上にアップしていきたい。
- ・ 1月の環境教育WGを経て、今年度中に学校に提供したい。周知の方法については、例えば環境教育を実践的にやっている学校や、教員研修講座に参加した先生などには、DVDなどの媒体で渡したりなどを考えている。
- ・ 今後、その他の単元の内容についても議論していく。。
- ・ 資料2-2 学習資料のとりまとめイメージ（釧路湿原および周辺の地層）について

説明。

3 作成を進めている WEB サイトの内容

- ・環境教育ワーキンググループのホームページ「気づくわかるまもる釧路湿原」で、「釧路湿原を題材としてとりまとめた学習資料」としてとりまとめを行っている。「地層」の単元に相当する内容として「釧路湿原及び周辺の地層」を紹介している。理科、社会、中学校でも使える単元として紹介している。内容は「釧路湿原の周辺の地層についてのトピック」、温根内、二本松、岩保木、昆布森などの写真を使った「釧路湿原および周辺の地層マップ」をとりまとめた。

(委員長)

- ・環境教育WGでは、教育委員会と協力し合って、生徒たちを自然の中へ連れて行けるような先生を増やすことを目的とした取り組みを行なっている。
- ・環境教育の教材に地域性を入れたいというねらいで、教材として使ってもらえるような、学術的にも信頼度があり、更にその地域に即している資料を提供しつつ、授業で使ってもらえる機会を増やしていきたい。

(委員)

- ・特定外来生物の駆除活動についても、地元の人がどれだけ係われるかという点が重要であり、現在その方向で動いているとも感じている。
- ・地域との連携については、非常にやりがいのある事と感じ、私も何か参画してみたいと考える。

(委員長)

- ・事務局の説明のように環境教育ワーキンググループの取り組みでは、現職の教員に参加してもらおう企画を教育委員会と相乗りの形で進めている。参加した教員からの感想が色々ある。例えばオオハンゴンソウを駆除した時に、ある教員は、「釧路市の人達が1人100本ずつ抜くとして、10万人が参加したら1000万本採れるんじゃないか」と言い、あるいは「もうここまで広がっちゃったら無理なんじゃないか」との意見もあり、それぞれが興味を持って考えながら参加してくれていると感じる。
- ・去年は希望者が多くて参加に制限をもうけるほどであったが、何とかできるだけ沢山の教員に参加してもらえることを考えたい。
- ・教員がこういう形で、釧路湿原自然再生などに関わるチャンスとは、再生協議会としてもっと協力することでより多くの教員参加が可能と考える。教育局としてはいかがか。

(委員)

- ・教員で地元出身の方は少ないので、もっと地域を知りたいという希望は多い。今回のように公的に募集をかけると教員も研修として出られるので、こういう機会がより多くなるといい。

(委員長)

- ・先生方が心置きなく参加できる環境を作るといったことも含めて今後とも取り組んでいきたい。

3) 鶴居村釧路湿原流域ガイドマップ作成について

(事務局)

- ・資料3 鶴居村釧路湿原流域ガイドマップの作成について説明。

1 ガイドマップ作成の背景・ねらい

- ・背景として、釧路湿原の保全・再生と地域産業を連携していきたいということが始まりにあった。
- ・釧路湿原の保全・再生の立場からは、釧路湿原の魅力や価値、再生の取り組みをより多くの人に伝えたい、そしてより地域と係わった取組みをしていきたいという思いを持っていた。一方、鶴居村としては、観光業の点から今の通過型観光から、じっくり滞在して鶴居村の良さを知ってもらいたいという考えを持っており、両者の連携が実現した。
- ・鶴居村は全域が釧路湿原の流域であり、これをキーワードとして鶴居村の魅力を紹介し、釧路湿原の保全・再生の活性化につながる様なガイドマップを作成していきたい。ガイドマップの作成は再生普及小委員会と鶴居村、鶴居村観光協会との協働事業として取り組んでいる。

2 経緯と進捗状況

- ・2011年の再生普及小委員会で検討したのが始まりで、年明けから鶴居村住民を対象にヒアリングを行った。6月の当小委員会で方針が決まった。釧路湿原自然再生協議会と再生普及小委員会、鶴居村、鶴居村観光協会とがタスクチームを作り、村内への周知、協力依頼を行った。9月に第1回目のミーティングを行い、地図作成の目的や進め方について意見交換を実施した。9月には鶴居村でふるさと祭りがあり、一部にブースを設けて、訪れた人に地図の掲載内容のアイデアなどを書いてもらい約20件ほどが集まった。また、鶴居村役場のロビーでもガイドマップ作成の紹介とアイデアの募集をして、小学生から大人まで約50件の意見が集まった。

この時はロビー床に湿原の航空写真パネルの展示も行った。

- ・10月に実施した第2回目のミーティングでは、マップに掲載したいモデルコースについて意見を出しあった。鶴居村と湿原の魅力を知ってもらえるようなテーマとして、タンチョウ、歩く、食べる、自然再生などのアイデアが出た。
- ・鶴居村で自然にやさしい取り組みをしているレストランや宿、農家や会社などの情報について募集や呼びかけで情報を収集し、それをマップに載せていきたい。
- ・ガイドマップ作成の取組みについて新聞にも掲載された。

3 ガイドマップの特徴と対象

- ・釧路湿原のワイズユースと、鶴居村の滞在型観光の促進とリピーターの増加を踏まえて、鶴居村でのたくさんの自然や食、歴史などの楽しみ方、過ごし方を紹介できるマップにしたい。

4 掲載事項（検討中）

- ・掲載事項として大枠は、1番目として「釧路湿原の豊かな自然とその楽しみ方」、2番目としては、「自然再生事業や外来種駆除などの活動の存在、参加の仕方」として、ボランティアの方たちが外来生物の駆除をやっていたり、タンチョウの自然採餌場を作っている取組み場所を載せたり、参加方法なども載せたい。
- ・3番目は「湿原とつながる人の暮らし」として、流域で繋がっている人々の暮らし、産業や食、歴史等を載せたい。4番目「湿原とつきあう知恵、自然への配慮など」として、前述の地元の人たちが行っている自然への配慮という点を載せたい。5番目として、「これらの魅力を味わえるモデルルート、散歩コース」を検討中である。

5 体裁・デザイン（検討中）

- ・体裁は、マップとブックのセットで考えており、A1版両面カラー印刷の折りたたみ地図と地図の内容を補完するA5版の冊子としたい。

6 今後の予定（検討中）

- ・これまで、マップに載せる内容についてアイデアが大分出てきており、サンプルを作ろうとしている。まずエリア分けしたうちの一つである幌呂川の流域を対象にして、サンプルをつくり、それをもとに次のミーティングを開いて、更にイメージや意見を出してもらったり検討して、次に全体を作っていくたい。
- ・当初今年度内に完成させることも考えたが、内容など検討すべき事項もたくさんあり、自然再生と地域との連携の初めてのモデルケースなので、じっくりしっかり来年度の夏頃の完成を目指して進めたい。

- ・ 今後は他の市町村とも連携していくが、取り組む形式としてマップであるのか別の形なのか検討しながら広げていきたい。

(委員長)

- ・ 先ず鶴居村のマップを作るのが、地域との連携のスタートラインである。単なる自然再生のアピールや、地域の観光マップではなく、その二つが合わさっているものを漠然と願いつつ悩みながら進めている状況である。
- ・ 鶴居村住民と三者間で、率直な意見を伺ううちに、お互いの良いところ、望ましいところが合わさり、良いものが出来そうなイメージが得られてきた段階である。

(委員)

- ・ 私もミーティングに参加し、素材の収集に時間をかけ、地元住民として役場の人間として思ったよりたくさんの情報が出てきたと考える。
- ・ これからマップの具体的な製作の際には、集まった情報を取捨選択して、本当にマップの中に載せるべき情報が何かという事を三者で詰めていく必要がある。

(委員長)

- ・ やりがいがある仕事になってきたと感じている。これを土台にして他の市町村でも同じ様な形か或いは別の形でつくることを検討したい。作成に参加してみたい方は大歓迎であり遠慮なく申し出て欲しい。

(委員)

- ・ 当小委員会からは委員長と私が参加している。その他のメンバーはほとんどが鶴居住民である。参加し、出された意見や情報の中には、知っているようで知らない事がたくさんあり大変勉強にもなる。次回も楽しみという感じで参加している。

(委員長)

- ・ マップ作成には、再生協議会と鶴居村、観光協会の三者が主体となって進めている。自然再生全体についても、そこに住んでいる人達がどれくらい係わるかによって、うまく進むことが出来るだろうと考える。今回のマップ作成も自然再生全体への地域参加のきっかけになるような作業であればいいと考えている。

4) 第2期釧路湿原自然再生普及行動計画の中間評価について

(事務局)

- ・資料 4-1 第 2 期釧路湿原自然再生普及行動計画の中間評価について（案）について説明。

1 経緯と趣旨

- ・現在、第 2 期の再生普及行動計画が実施されている。概要版として黄色いパンフレットを作成した。今年で 3 年目を迎え、中間評価を行いその評価を踏まえて、残りの期間で目標が達成できるように取り組んでいきたい。
- ・第 2 期行動計画は三つの柱を掲げている。一つ目は「釧路湿原を知る、楽しむ、学ぶ」、二つ目は「自然再生に参加する、行動する」、三つ目は「地域と関わり、人をつなぐ」という三つである。第 1 期の行動計画では 10 個の柱があり、第 2 期では 3 つに集約した。
- ・「釧路湿原を知る、楽しむ、学ぶ」に関しては、第 1 期に成果が出ており、引き続き取り組んでいる。「自然再生に参加する、行動する」については第 1 期では、なかなか成果が上がらなかったこともあり、第 2 期では特に重点分野として取り組んでいる。3 つ目の「地域と関わり、人をつなぐ」に関しては、更に今後続けて行こうとしており、マップ作成に係る鶴居村との取り組みとは、ここに当てはまる。
- ・中間評価の方法として、第 2 期行動計画の具体的な取り組みであるワンダグリンド・プロジェクト及び行動計画 WG 事務局の取組みの推移について振り返り、評価及び改善事項の検討を行い中間評価とした。

2 ワンダグリンド・プロジェクト登録数の分析

- ・表 1 は、2005 年から 2012 年までの取組み数と主体数である。第 2 期に入り、今までの取組みに加え、事務局として情報発信を活発にしたり、登録証の発行や普及シールの配布、更に主体者の横の繋がりを図るための交流会などを行ってきた。取組み数の推移としては、やや増えたか横ばいくらいである。取組みを行う団体・個人の数としては、2005 年の 33 から現在 50 まで増えている。取組みの内容は幅広くなってきている。

3 ワンダグリンド・プロジェクト登録事業における分野の分析

- ・ワンダグリンド・プロジェクトの登録事業を、第 2 期行動計画の 3 つの分野に振り分けて分析した。
- ・登録事業の主体者自己申告による振り分け（表 2、図 1）では、第 2 期行動計画の重点分野である「参加する・行動する」がやや減っている。原因としては（表 3 下）、登録内容は大きな変化がみられていない中で、第 1 期の 10 個の柱から第 2 期の 3 つの柱に変わった時に、主体者の振り分け先が変わったということが考えられる。事務局側が意図した概念が伝わっていない結果と考える。
- ・事務局がそれぞれの取組みについて振り分けし分析した結果としては、経年的に

大きな変化はあまりない（表 4、図 2）。「参加する、行動する」については、やや減少している。

4 事務局の活動

- これまでの事務局の取り組みを分類し振り返った。第 2 期ではワンダグリンド・プロジェクトの支援に加え、事務局として独自の取り組みを行い、特に第 2 期行動計画の重点分野を意識した様々な取り組みを行ってきた。
- 具体的には、航空写真を使って情報発信をしたり、ホームページで自然再生事業の地区毎の事業サイトをわかりやすく紹介したり、ブログを作ったり、現場見学会を行ったり、ワンダグリンド・プロジェクトの主体者と協力し市民参加の機会を増やしたりなどを行ってきた。表 5 に取り組みの推移を整理した。2010 年に第 2 期になってから、様々な取り組みを行っている。
- 表 6 の主な取り組み実績では、2010 年からの 3 年間の取り組みを整理した。

5 全体評価

- 一つ目として、第 2 期行動計画の重点分野の取り組みが進展してきたとは言えず、今後はこれまでの取り組みの継続に加え、「自然再生に参加する、行動する」に焦点をあてた取り組みをやっていく必要がある。
- 二つ目として、第 2 期行動計画の各分野の主旨が応募している方に明確に共有されていないことが示唆され、今後は第 2 期行動計画が何を目的としているかなど明確に伝えていく必要がある。
- 三つ目は、イベントに参加した人へのアンケートからは活動についての一定の評価が得られている。しかし知名度アンケートからは認知が十分でない結果であったり、鶴居村でのヒアリングでも周知不足や理解しづらいなどの意見が聞かれた。今後は情報発信やコミュニケーション、参加の機会づくりをより戦略的に行う必要がある。
- 四つ目として、これまで事務局では様々な団体の方や関係機関、協力団体等とのネットワークが蓄積されてきている。今後はこのネットワークを活用しながら、また自然再生協議会とも連携しながら、各小委員会を横断的に関係して連携を強化させていく必要がある。

(委員長)

- 評価を自分たちが行う場合には、どうしても感覚的な言い方になりがちであるが、今回は数値化して客観的に分析する手法をとった。

(委員)

- ・第2期行動計画の重点目標である「自然再生に参加する、行動する」という視点で、実施したワンダグリンダ特権カヌーツアーに参加した。もっと沢山の人が参加できるようにできないかという話が出た事があった。これまでのように新庄氏のカヌーを使って新庄氏に案内してもらっては受け入れ人数が当然少なくなる。釧路川には、カヌーの団体はかなりあり、そういう団体にも声をかけて参加してもらい、もっと受け入れ可能人数を増やしていけるのではと考える。
- ・予算のこともあるので、ある程度人数を限って募集したりする形になると思うが、参加者がある程度の費用負担をし、集合するなどして予算面を補う事も考えられる。例えば20名~25名で、年1回の開催などでもあまり広がっていかないのではないか。
- ・カヌー関係者についてもその機会にワンダグリンダに巻き込めるかもしれない。

(委員)

- ・第2期行動計画の重点分野である「自然再生に参加する、行動する」が進展していない原因とは何か。

(事務局)

- ・明確には把握していないが、これまで参加していない人に参加してもらう機会や情報発信の方法に今まで以上の工夫が必要と考える。

(委員長)

- ・最初にその三つの柱を立てて、例えば木の切り株で広がるような形の図にして、一番の「釧路湿原を知る、楽しむ、学ぶ」というのが初心者コース、そこから意識が深まってくると、2番目の「自然再生に参加する、行動する」という風により高度になると考えていた。それが実際やってみると、そういうことじゃないと感じ出している。
- ・「参加する、行動する」とは、「楽しむ、学ぶ」の上にある概念ではない。或いは3番目「地域と関わり、人をつなぐ」というのが、最終目標という風に言い続けてきたが、そうではなく、それぞれが独立している。いきなり3番目から入ることもある。最終的に楽しむことに至るという事も良いという、もっと自由度が必要とを感じる。
- ・情報を発信してどう人々に伝えるかという問題について、情報発信の大切さとは誰でも認識しているのに、なかなか伝わらないのはなぜだろうか。もしかすると一つの事をこれでいいかなと思って、一生懸命やればやる程、狭まって来るような不思議な事があるかもしれない。
- ・情報を発信する仕方という発想の部分が、同じ事をやり続けていると、他のやり方

がわからなくなるみたいな所が、あるのかなと感じる。どこかで根本的に発想を変える様なきっかけなどが必要なかもしれないと考える。とは言いながら黙々とやり続けるほかないという事も確かであるので、今のような考えも踏まえて努力していきたい。

(委員)

- ・各小委員会の連携という部分で、各小委員会の開催日程など情報共有して機会があれば他の小委員会を傍聴してどのような事業を行なっているか聞くことも重要と考える。

(委員長)

- ・オブザーバーなどとしてでも気軽に他の小委員会に顔を出せるような機会づくりも必要である。
- ・再生普及の小委員会が何らかの形でコーディネートの役割を担って、他の小委員会と連携を取ったり、打ち合わせをしたりしながら、各小委員会にそれぞれ割り振るなり、ある役割をもうひとつお願いするなりという事をこれから考えていきたい。

(委員)

- ・行動計画ワーキンググループ事務局のお手伝いをしている。先程何でその「参加する、行動する」が少ないのかという意見に関連して、ワンダグリンダ・プロジェクトでは、市民が個人として参加する行動するというよりは、参加する行動するための活動を作り出すという事が、ここでは期待されていると考えているが、当然そんなに簡単ではない。
- ・特に自然再生そのものに参加すると言っても、協議会の事業の中で参加できる機会というのは非常に限られている。
- ・例えば自分で自然再生を行う人が出てくるかといったら、自分で土地も使えて、或いはその協力関係を作って活動する事は、誰にでも簡単にできることではない。このことを前提とすると、呼びかければどんどん自発的に広がっていく事を期待するだけでは難しい。
- ・自然再生協議会や各小委員会との連携については、例えば地元の人や関心を持った人がそれぞれに自然再生のサイトをモニタリングする等、地域ならではの参加の形があるのではないか。再生事業の実施計画や各小委員会の中で、位置付けていくという事を是非行うと良い。

(委員)

- いろんな活動の件数を増やすことも必要であるが、重要なのは目的が活動を支援したり連携したりするということである。
- また、活動の分析をした結果、不足している分野はどこなのか、それをできる人は協議会にいないのか、そういったことを分析して活動を増やしたりすることも必要ではないか。
- 例えば、食べ物に湿原の名前がついている商品などを登録しているが、登録していない中にもたくさんあり、他にも登録出来る物があるという話になる。すると今度は逆に、名前に湿原と付いていれば何でも登録して良いのか、地元の原材料を使わなくては駄目ではないか等、難しい部分が出てくる。
- 協議会から認証するというのも中村先生が言っていたが、やはり予算の関係があり、地域としては脂っこい話ではあるけども、むしろ必ず出てくる。
- 地域おこしとか、口先だけで言うことは簡単だが、地域の人の利害ということに、結びついてくる話というのは、必ず難しい部分が出てくるのでその辺を探すために、分析したり整理をすることが大前提だと考える。
- 評価方法について、自己申告による分類と事務局の分類は必要か。自己申告が間違っているのなら、事務局で整理するといふ。
- 「自然再生に参加する、行動する」の整理方法で、第1期行動計画では、43 ページ表3の3~6を「参加する、行動する」としているが、3と4はむしろ自然再生の広報や周知に近い部分で自然再生について広めるなどではないか。この辺の整理が先ずは必要である。
- それぞれの活動の結果による分類方法がある。これは湿原の周知に役立ちます、これは自然再生に参加する人を増やします等があると良い。
- 主体がどういう人か、中には行政機関も主体となっていたり、事業者に近い立場の人が行っているもの、協議会の構成員の団体が行っているもの、あとは全く民間の人や地域が行っているものもあり、そういう分類の推移などを分析する手法もある。
- 活動のニーズとしては、参加者を募りたいから入っている人、単に企業として取り組んでいるというのを知って欲しいという事に入っている人などワンダグリンダに参加するそれぞれの目的で分類する事も出来る。
- 分析はもう少し詳しくする方が良い。今の3つの区分だけでは、区分の中身もわかり難い部分もあり、整理し直すと何が欠けているのか解るのではないか。

(委員長)

- 分析の手法については、10個あったものを3つのどれかに無理やり当てはめて、それに基づいたデータがどの位の信頼性があるかという点、実は不安なところもある。指摘の通りもう少し厳密に分析する方法を考える必要があり反省事項として

受け止める。

(委員)

- ・資料 8 ページに釧路湿原の自然再生に参加しようという事で、ミニチュアガイドに挑戦しようとか、ペーパークラフト講習会とか、咲くサクッキーの販売などいくつもメニューがあるが、これが自然再生に参加する事かというところではない。
- ・知る楽しむ、これが広がることで結果的に再生につながるだとか、これを機会に地域と関わっていくという事で良い。直接再生となると、植林などになってしまい、そうではないなという印象を持った。
- ・教員研修は非常に良いと思う。一方で、研修を受けた教員がどう子どもたちに伝えるのかは大変難しいだろうと、私自身の経験からもそう感じている。

(委員)

- ・今年は初めての取り組みとして、一般の方に参加の声をかけた。それまで参加したことのない子供達が、親と一緒に参加してくれた時に、子供達も興味を持っているという事がわかった。
- ・気になる事は子供達の参加ということが少なく、このことにどう対応するかを考えて行く必要があると最近凄く感じる。

(委員)

- ・情報発信に関連すると、エンビジョンという組織の中で、森の幼稚園というキャンプを四季を通じて開催している。集まる人は非常に固定化しており、その家族の年齢のローテーションが終わると引き継ぐ人がいない。
- ・情報の発信と集客という部分が非常に難しい。NPO でも、これはすごい技術でしかも無料の講習会があるというアナウンスをしても、ほとんど集まらない。地方に行くときに顕著である。
- ・今後こういう活動の中で難しいのは、どう継続して情報を流し、人を集めるかという中で、メンバー以外の一般の人の意見を聞くのも、非常に重要と考える。
- ・例えばワンダグリンドという組織を法人化するだとかということも今後の継続性につながるとも考える。

(事務局)

- ・資料 4-2 第 23 回再生普及行動計画ワーキンググループ「今後のワーキンググループの取組についての検討」で出されたアイデアについて説明。
- **「自然再生」を色々なところに出ていき伝えるアイデア**
- ・色々なところで伝えるアイデアとしては、湿原のワンポイント講座を定期的開催

する、町内会を巻き込んでどうか、イベントをしても同じ人ばかり集まってしまふことが多い、あまり交流のなかった層に働きかけて行こうなどがあった。

●湿原をフィールドに「自然再生」を知ってもらうアイデア

- ・湿原をフィールドにして自然再生をもっと知ってもらうというところでは、もっと気軽に現地集合や現地解散というツアーを行ってはどうか、他の小委員会との連携で新たな参加企画を作ったり、自然再生の事業地を巡るツアーなど意見が出た。

●多様な PR 手法のアイデア

- ・多様な PR のアイデアとして、湿原がなかなか生活に身近ではないというところで、もっと身近に感じられるようにした方が良いのではないかと、参加者が固定化しているという話も出た。
- ・ワンダグリンダ・プロジェクトに応募するメリットをもっと打ち出していく。ワンダグリンダの各取り組みを評価してもっと味つけを加えるなどの意見が出た。また、湿原と関わることで得になるような人を巻き込んでいく。PR 不足というよりは、PR の手法を考えなければいけない。もっとわかりやすい自然再生のパンフレットがあったほうが良い。地元へのヒアリングを継続的に行いましょう等と多様な意見があった。
- ・資料 4-3 中間評価を受けた再生普及小委員会の今後の取り組みについて（案）について説明。
- ・1つ目は、重点分野である「自然再生に参加する、行動する」を促進して行きたい、そのために具体的に何を進めて行くかについては、まずワンダグリンダにおいて市民参加を促進させていく。今年度始めた自然再生に参加しようのイベントを継続させ、ワンダグリンダ・プロジェクトの取り組みによる参加の機会を PR して拡大していきたい。情報発信の方法は工夫しながら継続していきたい。
- ・各小委員会と連携をして市民参加の機会を拡大していきたい。事業のサイト毎に市民参加機会を、もっと作れないか探りながら、年最低1回以上の取り組みという事を提案していきたい。すでに当小委員会で、ワンダグリンダで取り組んでいる様に、各取組ををパッケージにして集約し、それを当小委員会で売り出していきたい。
- ・2つ目は、従来と異なったアプローチでの参加の呼びかけと情報発信の促進として、参加者が固定化をしていくという中で、やはりアプローチの方法を変えていく必要があると考えていた。これまで関係の薄いところに働きかけていく必要がある。例えば町内会の毎年の行事に出向き、自然再生の取り組みというのを入れ込んでもらう。
- ・また、自然再生の今を伝えるツールや企画の実施として、何故自然再生を行わなくてはいけないのか、今湿原はどんな状態になっているのか、また自然再生の取り

組みとして、今何をやっているのかについて、わかりやすく紹介するツールがほとんどないため、それを紹介できるパンフレットを作成したい。また、自然再生事業地を体験できるような、市民向けのツアーを実施できないか考えている。湿原はほんとに乾燥化しているのかとか、一方湿原の良さを体感できるようなツアーを考えている。

- ・さらに自然再生を伝える人を増やすための講座などの実施を考えている。
- ・3つ目として、行動計画の趣旨の明確化と、ワンダグリンダの活動促進ということで、より行動計画の趣旨を明確にしていく必要があると考えている。行動計画の具体的な取り組みであるワンダグリンダ・プロジェクトの活動促進に何が必要か、難しいところではあるが考えてながら取り組みの促進にしていきたい。
- ・次回の協議会では、これらの取り組みについて他の小委員会に協力を呼びかけていく。

5) その他

(事務局)

- ・資料5 再生普及小委員会の予定（案）について説明。
- ・来年2月の中旬から3月に開催される自然再生協議会で今回話し合った内容を報告させていただきたい。次回の再生普及小委員会は5月から6月頃に開催したい。

(事務局)

- ・環境省釧路自然環境事務所より、今日の配布資料の中にある、2月9日に達古武森林再生事業地で行われる「森づくりと生き物調べ」調査体験会について紹介。